



特集

漁村集落の文化的まち遺産、 田牛八幡神社「獅子舞」「おっぴいしゃり」を深掘り

旧暦8月14、15日※、下田市の南端、田牛地区にて八幡神社例祭が行われます。

この祭典で特徴的な「獅子舞」、「おっぴいしゃり」という二つの行事が下田まち遺産に認定されています。
今回の特集では、この伝統行事がどのようにしてつながれているのか、地元の方々にお話を伺いました。

※平成30年は9月23、24日

獅子舞奉納から余興としての おっぴいしゃりでみんなが笑顔に

「獅子舞」、「おっぴいしゃり」という名称は下田まち遺産認定時の名称で、地元の方々は獅子舞を「神楽」、おっぴいしゃりを「おっぴひゃーり」と呼んだりします。

平成30年の祭典は9月23日(日)、24日(月)の両日行われます。

獅子舞は祭典期間中何度か行われますが、本祭り(平成30年は24日)、13時頃に神社の前で奉納されるものが「宮舞わし」と呼ばれ、本番となります。

「おっぴいしゃり」という響きが珍しく、言葉だけでは想像しがたいかもしれませんが、これは神社で獅子舞奉納が終わった後に行われる余興にあたるものです。木造の舞台を設置し、その段上で若衆がお面を被って指先と顔の向きが逆になるようなしぐさを繰り返して輪になって踊り、次第に子ども達も混ざって神社が笑顔で溢れます。また、「屋台」と呼ばれる太鼓が載せられた車輪付の台が、大太鼓、小太鼓、笛、鉦の音とともに地区内を練り歩きます。

※平成30年度のスケジュールは本紙P6参照



上写真・息を合わせて威勢良く奉納される獅子舞
下写真・屋台(太鼓台)と若衆が田牛の集落を練り歩きます。



地元の方に聞きました!

「祭りのことなら任せろ」 84歳にして現役の横山さんが語る祭り

話してくれた人：横山文夫さん(84歳) 聞き人：建設課下田まち遺産担当 西川

お会いした瞬間、引き締まった体格に驚かされました。

今も現役漁師で午前1時30分に起床して漁に出かけているそうで、その生活は少年の頃から変わらず。

心も身体も田牛に染まりきった横山さんに祭典に対する思いをお聞きしました。



祭りへの思いを語ってくれた横山さん

昔はみんなが自然とやるものだった

祭りを始めたきっかけは？

「きっかけも何も子どもの頃から自然とやっていたよ。やっぱり小さい頃から好きで見ていたから太鼓や笛の音も身体で覚えた。昔は青年団(現在の若衆)という組織があって、学校を卒業するとそれに入って自分で好きな楽器を選んで練習した。自分は大太鼓が華で格好いいと思っているので当然太鼓。獅子舞は神社の他に区長や欄宜(おごぎ)の家の前でも舞うが、神社で踊る舞は神事だし別格。祭りの花形で、一番上手い人が舞う。演者は特別待遇で女性にももてた。」



獅子舞奉納を終えて、境内を走り回る獅子。

神楽を中止するも、 復活させて保存会立ち上げへ

若い頃との変化は？

「昔は獅子舞、おっぴいしゃりの後に女性たちと一緒に芝居やコントをやったりした。獅子舞、楽器の練習に加えて芝居の練習もあったので、若い頃はとても大変だった。昭和43年に青年団が解散し、数年間神楽をやらない時期もあったが、その後若衆を復活させて毎年やるようになった。しかし、舞に暴れすぎる感が出て、次第に厳格さが薄れてきたと感じ、自分が主体となって平成13年に「神楽伝承会」を作って神楽の正しいあり方を若手に伝える活動もした。そして、昔は本祭りの日は夜に神楽を舞わなかったが、平成18年頃から夜にも行うようにしてお客さんがたくさん見に来るようになった。」



子供たちも輪の中に入って、一緒に踊るおっぴいしゃり

MEMO

おっぴいしゃりの語源は？

「おっぴ^{しっぽ}」は尻尾、すなわち浴衣の裾を尻端折^{すそしりはしよ}りすること、と「静岡県文化財調査報告書第61集、小稲の虎舞(田牛の獅子舞も調査されている)」の74ページに記載があります。以下は担当の私見ですが、しっぽは「おっぽ」とも言いますし、「尻端折り」は着物の裾をまくって端を帯に挟むことで「しりっぽしより」とも読むと辞書にあります。「おっぽ」に「しりっぽしより」がなまって「おっぴいしゃり」、なのかもしれません。

お話を聞いて…

「獅子はおとなしいのは駄目。勢いと、びしりと止める所作が大事。雌獅子と雄獅子の阿吽の呼吸が大事。」という横山さんの言葉に情熱を感じた一方、「雨のときに威勢良く獅子同士をぶつける、と先輩に言われたが獅子頭を壊れてしまうといけないのでそれはできなかった」というコメントに横山さんの祭りに対する情熱以上の愛情を深く感じ取りました。また、取材中に3kgのダンベルを持ってきて「祭りまで1か月。これで鍛えておかないと上手に叩けないだよ」と、笑顔でお話され、祭りへの思いをひしひしと感じました。